

# ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

## ——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

### 第八回

#### そもそも世界って、なに？

——前回、日本は内向き思考になり、海外のことへの関心が薄れ、「江戸時代」のようになっている。そしてもっと目を向けなくてはならない海外の国々で、ファッション化が進んでいる、というお話でしたが、そもそも、世界ってなんなんでしょうか？

佐藤 世界のとらえ方には、いろいろな考え方がありますが、欧米の人たちは「国とは？」  
「世界、宇宙とは？」といった世界の成り立ちに関心が高いですが、私たち日本人の多くは、そうしたことに関心が高くありません。

大きな違いは、「存在論」の有無が挙げられます。でも、あとで述べますが、東洋にも「存在論」に該当する考え方はあるんですよ。

「存在論」の原語は、ドイツ語で **Ontologie**、ラテン語で **ontologia** です。この言葉はギリシア語で「存在するもの」（存在者）を意味する「オン」（on）と「論理」を意味する「ロゴス」（logos）を結んで、17世紀初頭ドイツの哲学者ルドルフ・ゴクレニウスによって作られた言葉とされています。

われわれが存在するこの世界は、どのようにしてできましたか？

——ビッグバンがあって……。

佐藤 それは、科学的な説明ですね。では、日本にも神話がありますが、その神話的説明だとどうなっていますか？

——天<sup>あめ</sup>の浮橋<sup>うきはし</sup>でイザナギとイザナミが……。

佐藤 そうです。イザナギとイザナミが棒で掻き混ぜて、世界を創りました。これが、キ

リスト教、ユダヤ教だとどうなりますか？

——「光あれ」です。

**佐藤** ヨハネの福音書で、「光あれ」と神様が言うと、混沌が分かれていく、というのが、『創世記』でしたね。それでは、仏教ではどうでしょう？

——確か、「虚空」に風が吹いてきて、その風がぐるぐる回って……と以前、佐藤さんから教えていただきましたが……。ビッグバンといった科学的アプローチの宇宙創成は、聞きかじったことはありますが、「虚空に風が吹いてきて」なんて、教えていただくまでは、そんなに関心がなかったです。

**佐藤** そうですね。この「関心がない」というところが、昨今の多くの日本人の考え方の特徴であり、その特徴が顕著になって現れてきたのが、海外など「外部＝世界」への関心の低さなんです。

先に述べましたように、欧米人は、世界の起源や その存在について、といったことに、とても関心が高いのです。それに比べて仏教的な世界にいる我々は、「存在」について関心が低い。しかも、仏教の世界にも「存在論」に該当するものがあるにもかかわらず、関心が低いのです。

仏教においては、小乗仏教の『阿毘達磨俱舍論（アビタツマクシャロン）』で、仏教的

宇宙観が展開されています。

日本でアビダルマ（阿毘達磨）哲学を継承するのは、法相宗という宗派で、興福寺や薬師寺などがこの宗派です。

アビダルマ。以前に、少しお話ししましたが、仏教の世界で、「宇宙はどうやってできたか」もう一度学んでみましょう。

仏教には、創造主や宇宙の支配者といった概念がありません。仏教は「神」を想定していない無神論です。仏像は神様じゃなくて、真理を知った人間を形にしたものです。

『阿毘達磨俱舍論』では、宇宙は、サットヴァ・カルマンによって生まれました。「サットヴァ」とは、「有情<sup>うじょう</sup>」とか、「衆生<sup>しゅじょう</sup>」とか訳されている単語で、生命を持って存在するもの、あらゆる生き物を意味します。

常識的な順序から言えば、まず自然界の存在が先にありきで、次にそこに生命を持つものが誕生して、その行為・動作が起こると考えるでしょう。

にもかかわらず、『阿毘達磨俱舍論』では逆に生命あるものの行為・動作によって、自然界が生み出されるという考え方です。とすると、自然界の成立に先立って生命あるものが存在し得ると考えなければならないこととなります。

——それは、どういうことでしょうか???

**佐藤** まず世界にあるのは、目に見えない業<sup>ごう</sup>、有情の業＝サットヴァ・カルマンです。その働き、関係性によって、自然界が形成されていくのです。

この自然界は、多数存在します。広大な宇宙空間の中では、われわれが存在するいま、この場所が自然界にまだ成立していないときにも、他の場所にはすでに他の多くの自然界が存在していると考えられていました。

こうした仏教思想は、意外に思われるかもしれませんが、われわれには、きちんと根付いています。

ライトノベルやSF小説を思い出してみてください。物語の中に必ず異界が存在していませんか。われわれの生きる世界とは別のパラレルワールドなるものが存在する、そんな設定が多くないでしょうか。こうした設定が、すんなりとは言わないまでも、われわれが受け入れることができるのは、先のような仏教思想の世界観が私たちの中に、知らず知らずのうちに染み付いているからにほかなりません。

宇宙の形成は、『俱舍論』の記述にしたがえば、まず、広く虚しい空間に、サットヴァ・カルマンの力が働き、どこからともなく微風が吹き起こることから始まります。やがてその風は、空間の中で次第、次第にその密度を増し、ついには円盤状の固い大気の層＝風輪を形成すると、以前（第四回）お話ししましたね。

この考え方を示したアビダルマという人は、大した人なんですよ。

飯は他人に食わして貰って、草庵に籠もって、宇宙はどうなっているのだろうか、どうして出来たのだろうか、と考えている人でした。

ところが、その世界観、考え方が余りにも煩雑・複雑になり、誰も理解できなくなってしまいました。そうした過程を経て、大乘仏教が出てきました。

『俱舍論』の記述に従えば、風が吹いて出来あがった円盤状の大気の層は、160万ヨージ

ヤナにもなります。

——ヨージャナ？ ってなんですか？

**佐藤** ヨージャナというのは距離の単位です。

櫻部建著／上山春平著『存在の分析「アビダルマ」—仏教の思想2—』（角川ソフィア文庫）によれば、1 ヨージャナを8キロメートルとして計算しています。すると、この大気の層の厚さは1280万キロメートルになります。そしてその外周（周囲）はアサンキャとなっています。アサンキャとは無数、つまり無限ということです。

この風が吹いて起こった「大気の層」の円盤（風輪<sup>ふうりん</sup>）の上に、やがて薄い膜ができる。

牛乳を鍋で温めると、上に膜ができる、そんなイメージです。その膜は水の膜で水輪<sup>すいりん</sup>と呼ばれます。その上に金属の膜の金輪<sup>こんりん</sup>ができたのだと、以前お話ししました。

今回ここでは、その水輪、金輪の大きさや、形成されるまでの時間を詳しく見てみましょう。

水輪の厚さは896万キロメートル。水輪の水はなぜ零れ<sup>こぼ</sup>れないかといいますと、周囲を回りつづける風の風圧で外に零れない、という理屈です。

無限に広がる円盤状の大気の層の中心部に、それに比べれば遙かに小さいが、やはり同じ円盤状の水と黄金の層が重なって載っているのです。

水輪の上にできた金輪の表面が大地になります。大地の上に、山、川などが形成されて自然界は完成です。

ここまでの時間は1 アンタラ・カルパ。

——アンタラ・カルパ???

**佐藤** アンタラ・カルパとは時間の単位です。1 アンタラ・カルパは一説によれば 1599 万 8000 年とされています。

それほどの長い年月をかけて形成された自然界に生物が生まれます。天人、天女と呼ばれる神々ですが、彼らもサットヴァの一種に過ぎません。なぜなら先に述べましたように、仏教は「絶対神」「超越神」を想定していないからです。

天に天人、天女。地上に、人や動物。地下に地獄の鬼、といった順に形成され、生物界が完成します。

自然界形成から生物界形成までは 19 アンタラ・カルパ。全世界の形成は 20 アンタラ・カルパかかることとなります。約 3 億 2000 万年です。

こうして出来あがった世界はそこから 20 アンタラ・カルパの間、持続・維持されます。そして 20 アンタラ・カルパを過ぎると、滅亡へと向かい始めます。滅亡に向かい始めてから滅亡完了までは創世と同じく 20 アンタラ・カルパかかります。創世の逆回しのよう  
に地獄、地上、天上と崩壊していき、生物（サットヴァ）のいなくなった自然界に「七つの太陽」が現れ金輪の上に出来た山、川を焼き尽くします。そこに水災によって水輪もなくなり、風災によって「大気層」も消え、全世界＝宇宙は広大な虚空に帰します。

虚空に帰した世界は 20 アンタラ・カルパの間、虚空のままです。この期間を「空無<sup>くうむ</sup>」

と呼びます。そして空無の 20 アンタラ・カルパが終わるとき、また風が吹いてきて大気の層（風輪）を形成し始め、宇宙創成が再び始まるのです。整理しますと、世界（自然界・生物界）の形成に 20 アンタラ・カルパ。

出来た世界の維持・持続に 20 アンタラ・カルパ。

世界の滅亡・破滅に 20 アンタラ・カルパ。

滅亡後の虚空の世界、空無の時間が 20 アンタラ・カルパ。

この周期  $4 \times 20$  アンタラ・カルパ = 約 12 億 8000 万年を『俱舍論』では、1 マハー・カルパといいます。

インド人は途方もない長い長いスパンで物事を考えていたことが、この考え方からも見て取れます。

——ちなみに、その世界観の中では、2011 年、2012 年などは、どの過程に入っているのでしょうか？

**佐藤** いま 2012 年はこの周期の中のどこに位置しているのかといいますと、世界の滅亡・破滅の 20 アンタラ・カルパの期間に位置しています。

——えっ、そうなんですか？ たしかに、リーマンショックに、東日本大震災、福島原発の事故……。明るい話題は少ないですもんね。



佐藤 けれど悲観することはまったくありません。1 アンタラ・カルパはなんといっても1599万8000年ですから、まだまだです。

破滅の期間は、20 アンタラ・カルパ=約3億2000万年です。もっとも、今年や来年が、その3億2000万年の最後の年かもしれませんよ。世界を見ても、マヤ暦なども2012年の12月28日で終わりですし……。

——わっ、そんな恐ろしいことを……。しかし、こうした世界の創世をしっかりと学んでおけば、欧米の人々とも、哲学の世界で同じ土俵に上げられそうですね。

〈つづく〉

### 今月の内容をより深く学ぶための本

『存在の分析「アビダルマ」—仏教の思想2—』

櫻部建著／上山春平著（角川ソフィア文庫）